思いやりの心をもち
かかわり合う子どもを育てる
－横断的な道徳学習を通して－

竹原市立竹原小学校

所在地：竹原市田ノ浦二丁目５－１
電　話：0846－22－2105
児童数：２７９名
URL：http://www4.ocn/ne.jp/~takesyo/

＜取組みと成果のポイント＞

「体験活動」や「他の教育活動」との関連を強く意識した「道徳の時間」を創造していくことで，道徳性の更なる育成をめざす道徳教育を積極的に進めてきている。「横断的な道徳学習」を取り入れ，授業改善を進めることにより「道徳の時間はためになる」と感じる児童が増加している。

また，「思いやりの心」を育てるために，学校行事等を見直したり，たてわり班活動を取り入れたりして，学校全体として組織的な取組みを進めている。その結果，学校生活の中で休憩時間に異学年と遊んだり困っている子に声をかけたりする等，思いやりの心をもちかかわり合う姿が見られるようになってきている。

＜キーワード＞

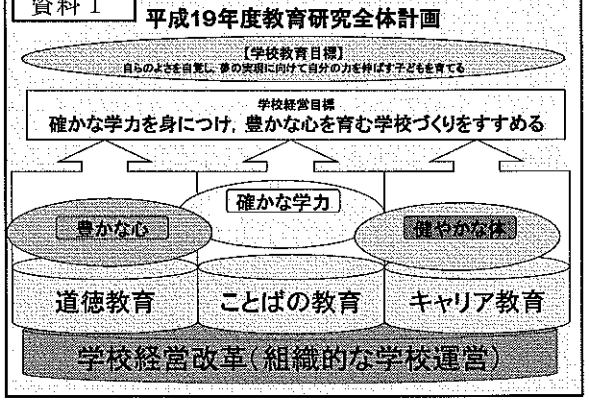
思いやりの心　横断的な道徳学習　向社会的行動　異学年交流

１　研究の特色

（１）組織的な学校運営

本校では，資料１に示すように，学校教育目標を受け重点目標を「確かな学力を身につけ，豊かな心を育む学校づくりをすすめる」とし，「知・徳・体のバランスのとれた子ども」の育成をめざしている。その基盤として，組織的な学校運営を位置付け，組織全体で一貫した教育活動を進めている。

資料１　平成19年度教育研究全体計画



（２）研究の方向性

本校の研究テーマは，児童の実態・指導方法の改善・保護者の願い等の視点から導き出したものである。

本校では，思いやりの心をもつことを「相手の気持ちを推測し相手のことを考えて行動しようとする感情」であると考え，思いやりの心に根ざした行動を「向社会的行動」と捉えている。そして，向社会的行動は児童の共感性が動機付けとなっていると捉えている。

研究仮説・作業仮説については資料２のように設定した。

作業仮説を図に表すと資料３のようになる。このように，人・自然・社会とのかかわりを仕組むことによりかかわり合うことのよさに気付いていくと考える。

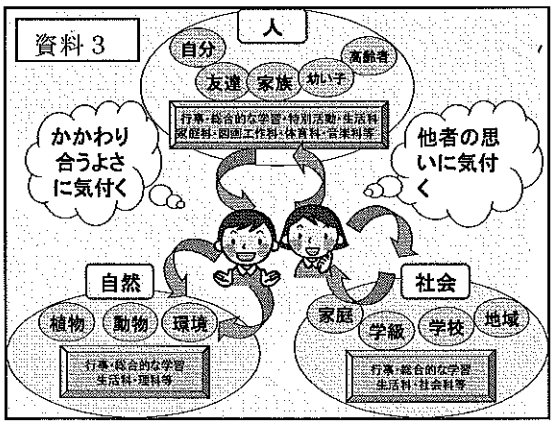
資料２

研究仮説について

【仮説】
横断的な道徳学習を進めることによって，児童の向社会的行動の発達を促すことができるであろう。

【作業仮説】
横断的な道徳学習で，教科等に応じて自然・人・社会とのかかわりをもつ場面を仕組み，他者の視点に立った感じ方や考え方を感得すれば，かかわり合うことのよさに気付くであろう。

資料３

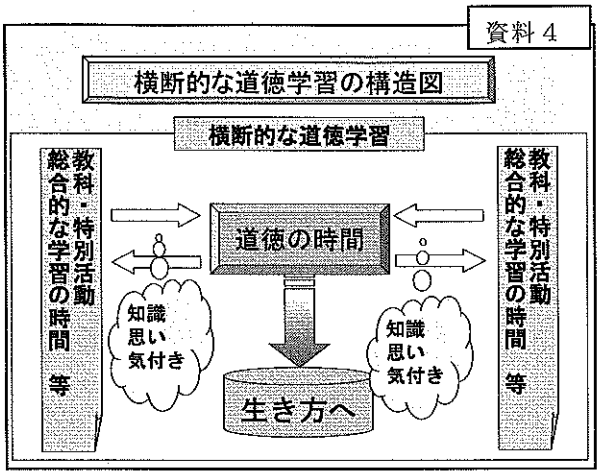


「道徳の時間」は，「道徳の時間」以外のあらゆる教育活動と密接な関連を図りながら，それらを補充・深化・統合し道徳的価値の自覚を深め，道徳的実践力を育成することが目標とされている。「体験活動」や「他の教育活動」との関連を意識した「道徳の時間」を進めることの重要性は言うまでもない。

「体験活動」や「他の教育活動」との関連を強く意識した「道徳学習」を，本校では「横断的な道徳学習」と名付けて研究を進めている。「横断的な道徳学習」とは，児童の共通体験や知識と「道徳の時間」とを短期間で直接的に結びつけた学習である。

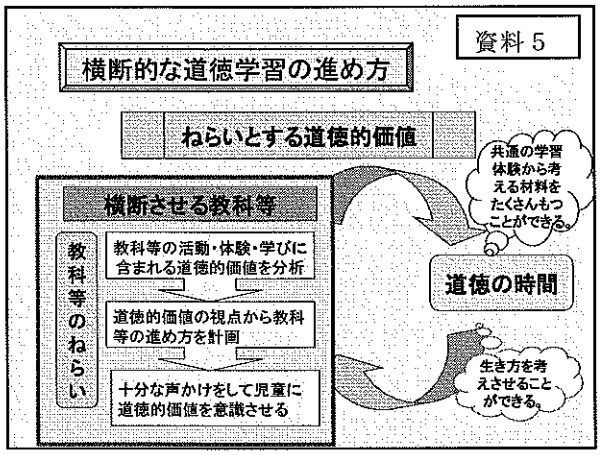
「横断的な道徳学習」を進めることにより，児童は考える材料をたくさんもつことができ，授業の中での話合いを深めていくことができる。指導者は，児童に共通体験や知識を的確に提示し，他教科等との関連を明確に意識させることによって授業を深めていくことができる。

資料４



「横断的な道徳学習」を構造図として表したのが資料４である。

資料５



教科・特別活動・総合的な学習の時間等，学校生活におけるあらゆる場面で児童は多くのことを体験し学んでいる。体験し，学ぶことの中には当然多くの道徳的な価値が含まれている。共通体験や共通の学びをもとに，かなめとなる「道徳の時間」において，学んだことを補充・深化・統合することにより道徳的価値の自覚を深め，道徳的実践力を育成することができる。つまり，教科等の学びから「道徳の時間」を生み出し価値を高めていくことで，児童に自分の生き方を考えさせることができると考える。（資料５）

「横断的な道徳学習」の特徴は，次の３点にまとめることができる。

○　価値により深く迫らせることができ，児童自身の生き方を考えることができる。
○　特定の道徳的価値と教科等との関連が直接的で緊密である。
○　比較的短期スパンである。

２　実践事例

（１）「横断的な道徳学習」を取り入れた授業実践事例

①学年　第６学年　男子２１名女子２０名
②主題名　「みんなの力で」４－（１）
③ねらい　資料の「えり子」の気持ちを話し合うことによって，協力して責任を果たすことの大切さに気付き，自分の役割を自覚して友達と協力していこうとする心情を育てる。
④資料名（出典）「森の絵」（みんなのどうとく）
⑤授業の内容

児童が場面設定を理解できるように意識して板書や範読を行った。その際，前半と後半とに分割して資料を範読したり場面ごとに挿絵を利用したりしていった。前半では，えり子の迷いや心情に深く共感させ，後半は，友達の言動から変化していくえり子の心情や，目的に向かって主体的に協力し合える学級の姿を，共感をもって受け止めさせ，ねらいとする価値のよさやすがすがしさを感じさせていくようにした。

中心発問においては，文男の言葉に対するえり子の思いを出しやすくするためにワークシートを使用し，その後，交流させていった。児童は，自分の仕事に集中できないえり子が，「誰かがやらないと劇にならない」という文男の言葉により内省し，葛藤を乗り越える心の変容に気付いていた。また，資料の場面設定が自分たちの劇づくりと似ていることもあり，自分と重ね合わせて考えることができていた。

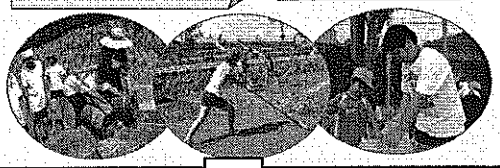
（第6学年）

～総合的な学習の時間・特別活動と道徳の時間とを横断的に扱って～

道徳の時間までの学習・活動

＜総合的な学習の時間「プロジェクトSalt」＞
・「竹原の塩」の歴史 調べ学習
・塩づくりの方法を体験
・まとめ 音楽劇「竹原塩物語」

＜特別活動「たてわり班活動」＞
・たてわり班掃除
・たてわり班遊び



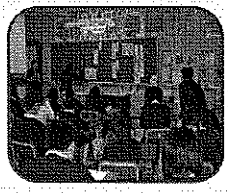
道徳の時間

《中心発問》

ワークシートを活用

・みんなのために頑張る文男に比べて自分がはずかしい。
・文男は本当にしたい係でなくても頑張っている。
・文男のように自分の役割を果たしたい。
・文男のように責任感をもって自分の仕事を頑張ろう。

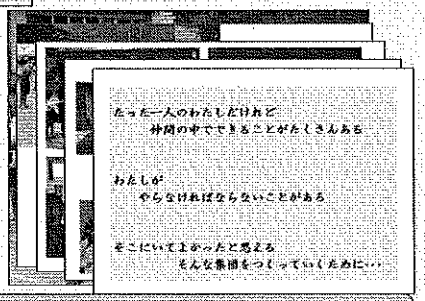
《展開後段》



生活を振り返る場面

「私も，えり子のようになりたい役ではなく，一人で歌うのがはずかしくていやだった。でも，みんなが頑張っているのを見て，大きな声で頑張って歌いたいと思うようになった。」

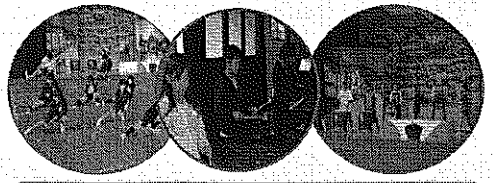
《終末》



映像を視聴することにより価値をあたため今後の生活に生かそうとする意欲をもたせる

道徳の時間後の学習

＜総合的な学習の時間「プロジェクトS」＞
・まとめ 音楽劇「竹原塩物語」に向けて



自分たちの劇を自分たちの力で創り上げていく。

終末においては，児童が今まで高学年として自分の役割を果たしてきたことや，みんなで創りあげようと，協力して音楽劇や鼓笛等に取り組む姿と「心のノート」の言葉を組み合わせ，映像として提示した。そのことにより，最高学年として，６年生の一人として，役割を果たしていくことへの意欲をもたせたいと考えた。

児童の振り返りカードの結果（人）	4	3	2	1
今日の学習は楽しかったですか。	37	4	0	0
発表しようとがんばりましたか。	25	11	5	0
友達の意見をしっかりと聞きましたか。	31	9	1	0
学習してよかったと思いますか。	40	1	0	0

４とても　３まあまあ　２あまり　１まったく

（２）日常的な実践

①やさしさいっぱい運動

いいとこ見つけ（帰りの会）

ほかほかコミュニケーション（たてわり班活動・異学年交流）

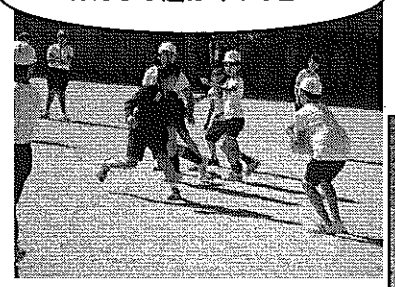
みんなで遊ぼうタイム（学年・学級の全員遊び）

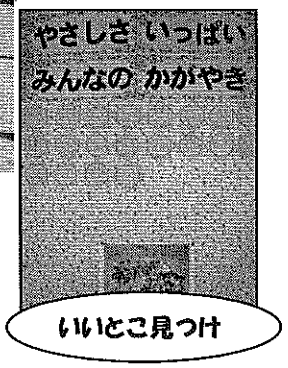
本校では，「やさしさいっぱい運動」と名付けて，「思いやりの心をもちかかわり合う子どもを育てる」ための取組みを日常的に行っている。

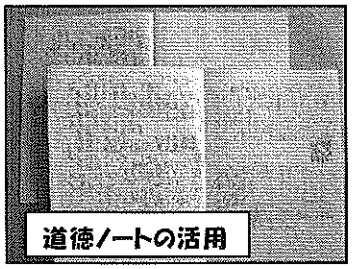
たてわり班活動として，なかよしグループによる清掃活動や遊び等を行っている。活動後には感想を掲示し，嬉しかったことや楽しかったことをお互いに伝え合うようにしている。

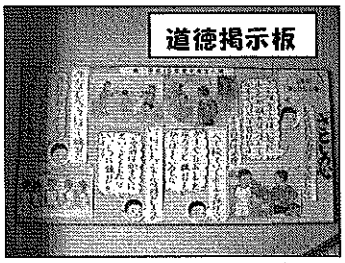
また，学習場面においても意図的・計画的に異学年同士の交流活動を設定し交流を図っている。児童は，異学年同士のかかわりの中で，異学年のやさしさやかかわり合うことのよさを感じることができているのではないかと考える。

みんなで遊ぼうタイム









②児童の心の動きをつかむために

児童理解とその後の指導に生かそうと，教育活動全体における児童の向社会的行動の観察を進めている。また，「道徳ノート」に「道徳の時間」だけでなく，横断的に扱っている学習や異学年交流活動等における心の動きも書き留めておくようにさせている。

③道徳掲示・道徳通信

道徳教育の環境づくりとして，校内に道徳掲示を計画的に行っている。また，保護者用道徳通信を定期的に発行するようにしている。

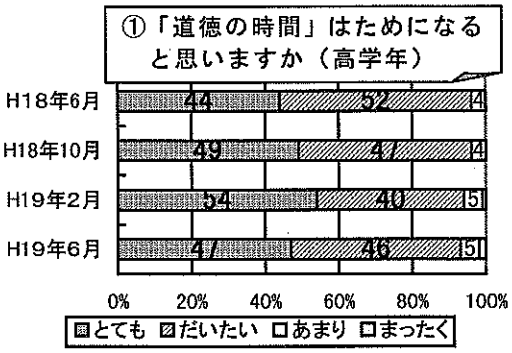
3　研究の評価

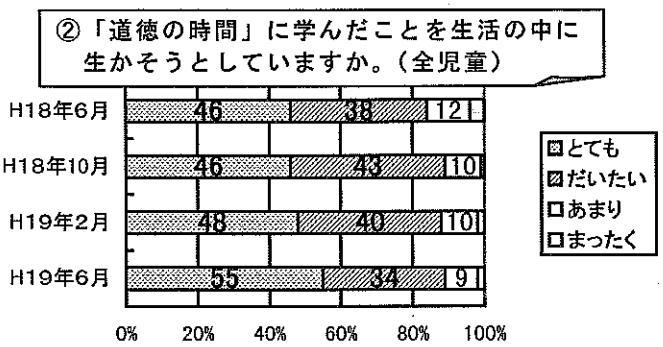
（１）横断的な道徳学習の授業開発・実施

⇒昨年度，各学年５本の横断的な道徳学習プログラムを開発し実施することができた。（今年度も，５本の開発・実施予定。）

（２）有用感をもたせる「道徳の時間」の創造

⇒「道徳の時間」に関する意識調査から





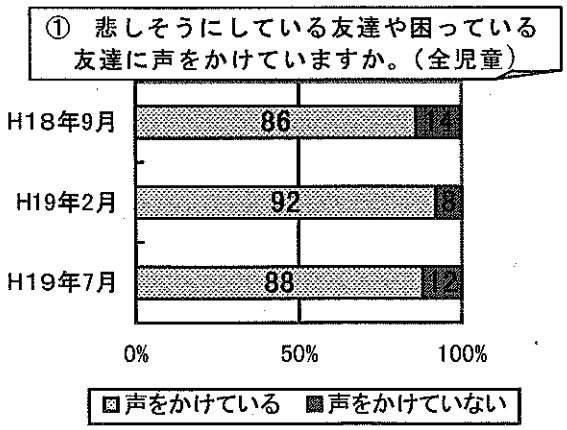
（３）向社会的行動の発達を促す日常的な取組みの充実

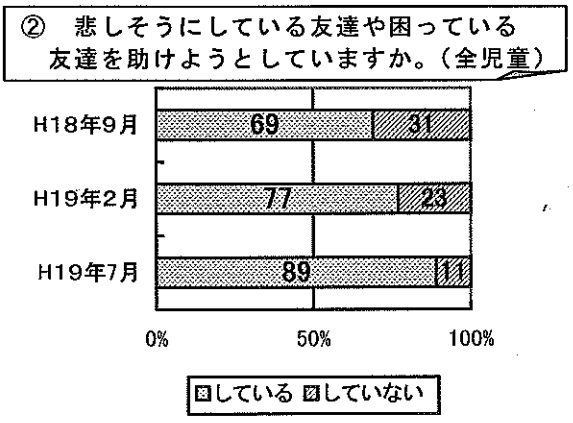
①異学年での交流を日常的に仕組み，かかわり合う場面の充実を図る

学校全体で，かかわり合う場面を意図的・計画的に充実させることができている。「道徳の時間」と横断させるだけでなく，様々な教科の学びや活動を向社会的行動の発達につなげて計画・展開させようという意識が本校職員の中で高まってきているのではないかと考える。

②他者の視点に立った感じ方や考え方を感得させる方法を探る

⇒向社会的行動に関する意識調査から





昨年度の調査からは，９月には道徳的配慮よりも自分自身に向けられた結果に関心をもっている児童が多かったが，２月には「声をかけることはよいことだから」「声をかけるのが当たり前」等，内面化された価値や規範，義務及び責任を含んでいる理由が多くなっていた。今年度も，引き続き，理由付けを分析し，実践に生かしたい。